

救いの贈り物

[詩編 46 編 1～12 節]

【指揮者に合わせて。コラの子の詩。アラモト調。歌。】

神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。

わたしたちは決して恐れない

地が姿を変え 山々が揺らいで海の中に移るとも

海の水が騒ぎ、沸き返り その高ぶるさまに山々が震えるとも。〔セラ

大河とその流れは、神の都に喜びを与える

いと高き神のいます聖所に。

神はその中にいまし、都は揺らぐことがない。

夜明けとともに、神は助けをお与えになる。

すべての民は騒ぎ、国々は揺らぐ。神が御声を出されると、地は溶け去る。

万軍の主はわたしたちと共にいます。ヤコブの神はわたしたちの砦の塔。〔セラ

主の成し遂げられることを仰ぎ見よう。主はこの地を圧倒される。

地の果てまで、戦いを断ち

弓を砕き槍を折り、盾を焼き払われる。

「力を捨てよ、知れ

わたしは神。国々にあがめられ、この地であがめられる。」

万軍の主はわたしたちと共にいます。ヤコブの神はわたしたちの砦の塔。

[1] 宗教改革—私たちの「救い」をめぐる出来ごと

今日10月31日は、「宗教改革記念日」と言われています。この言葉は一般化していますがけれども、少し誤解されやすい言葉だという気も致します。1517年（今から504年前）10月31日、ドイツの修道士だったマルチン・ルターが、当時のローマカトリック教会に、公開の討論の依頼状を張り付けたことが発端になったと言われます。けれども、ルターが何か古いキリスト教会から新しいキリスト教を作ったということではありません。むしろ、「原点回帰」を訴えたと言ったが良いと思います。何の原点かと言うと、私たちの「救い」についての原点です。

今日私たちは、教会で「救い」の言葉を聞くことが出来るんです。これは本当に素晴らしいことです。教会がこの世の中にある理由は正にそこにあるのですね。「救い」は勿論教会の牧師や神父が考えたことではないし、ルターが作った体系でもありません。もともと**聖書**の中で語られているものです。それが当時の教会の巨大な組織（システム）の故に人々には見えなくなってしまっていたのですが、その「救いの良き知らせ」をルターが自分で聖書に取り組み、「再発見」したのですね。ですからよく**宗教改革は、「福音の再発見」**だと言ったりします。

[2] 試練が多かったルターの人生

今日開いています**詩編 46 編**は、その福音を再発見したルターがとても愛した聖書の言葉だったと言われていています。彼は結構辛いことが多い人生を送っていた人でした。当時流行っていたペストには罹りませんでしたけれども、幾つかの病気も抱えていました。結婚して家庭も持ちましたが、エリザベートという娘さんは生後 11 か月で死んでしまったということです。そして彼は当時のキリスト教会に対して鋭い問題提起を起こしましたから、教会の組織からは敵対視され、信頼していた者も彼から去って行ってしまったり、とても孤独でありました。

でも、そういう中で、音楽の才能も与えられていたルターは『**神はわがやぐら**』という讚美歌も作りました。これが、詩編 46 編の言葉からインスピレーションを受けて作った、宗教改革の代名詞とも言われるような讚美歌で、第一節はこうです。「**神は わがやぐら わが強き盾。苦しめる時の いと近き助けぞ。おのが力 おのが知恵を頼みとせる よみの長(おさ)も など恐るべき**」。これは 46 編の 2 節、3 節などから作られています。「**神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。わたしたちは決して恐れない**」。

ルターは、苦しみの真っ只中でこの賛美を作り、自ら歌ったんです。

そしてこの詩編は、“自分が” 神様を掴むのではなくて、“神様が” 私をしっかり掴んでいて下さるのだ、闇が深くとも、夜明けと共にこの方は来られ、私を見離すことはなさならいという、神様の側の真実をひたすらうたっています。

46 編の 5~8 節にはこうあります。「**大河とその流れは、神の都に喜びを与える。いと高き神のいます聖所に。神はその中にいまし、都は揺らぐことがない**」。

夜明けとともに、神は助けをお与えになる。すべての民は騒ぎ、国々は揺らぐ。神が御声を出されると、地は溶け去る。

万軍の主はわたしたちと共にいます。ヤコブの神はわたしたちの砦の塔。」

これは旧約聖書ですが、勿論ルターは、新約聖書の**イエス・キリスト**こそが、人の姿をお取りになって、私たちと一体化して下さったまことの神だ、ということ

の確信を持っていました。それが『神はわがやぐら』の第2節に現れています。
—「いかに 強くとも いかでか 頼まん。やがては朽つべき 人の力を。われと共に
戦い給う イエス君こそ 万軍の主なる あまつ大神。」

ルター自身は決して強い人間ではなかったのです。英雄などではない。けれども、**本当に依り頼む方を知っていた**のです。1521年、彼はウォルムスでの帝国議会に召喚され、あなたの文書を撤回するかと問われるのですね。その時のルターの言葉は良く知られています。—「皇帝陛下、選帝侯様、私は先に自ら引用し、挙げた聖書の言葉を確信しております。**私の良心は神の言に捕えられています**。その良心に逆らうことはできませんし、何ごととも取り消すことは出来ません。私はここに立っています。神よ、私を助け給え。アーメン」。

追放された彼は命の保障もなかったのですが、不思議にもヴァルトブルグ城に匿ってくれる者が現れ、その隠れている生活の中で、ルターは**新約聖書**を民衆が読める**ドイツ語に翻訳**したのです。そして当時の印刷技術の進歩の中で、一気に広まっていったのです。つまり、人々がじかに聖書の言葉から、神様の言葉を聞くことが出来るようになっていったのです。それまではラテン語で、限られた者しか聖書を読むことは出来ませんでしたからこれはとても大きなことでした。

[3] 神の恵みをただ受けて

ルターの宗教改革の特徴は、三つの「のみ」だと言われます。それは「**聖書のみ**」、「**信仰のみ**」、「**恵みのみ**」です。そして、それは全部「**キリスト**」というお方の中で一つとなっていると思います。

ルターが最も探し求めていたものは「**本当の救い**」でした。彼は若い頃、雷に打たれて「**助けて下さい。生涯をあなたに捧げますから**」と言ってしまった後から厳格な修道会に入り、一生懸命お務めをしていたのです。極めて真面目な彼は「**神の義(ただしさ)**」という言葉に出会い、それに到達できない自分を感じ、自分は神様に裁かれると思ってしまったのですね。けれども自分で聖書を読み進める中で分かったというのですね。それは「**神の義は、その福音の中に啓示されている**」(口語訳) というローマの信徒への手紙 1章 17節の中の言葉で、それこそ、おのが力、おのが知恵、おのが信仰で救いを獲得しようとする試みは違うのだ、そうではなく、**この無力で、自己中心な私のために、イエス・キリストが身代わりになって下さったのだ**、それが「**神の義**」だ。それは「**神の恵み**」そのものだ。私はそれを受けさえすればよいのだ、それが福音、良き知らせなのだと言って、ルターは「**私は世界が全く新しく開けたように感じた**」と言ったと言います。

「免罪符」という言葉をお聞きになったことがあると思いますが、罪を免じる、赦すお札と言われますが、正確には罪そのものを赦す物ではありませんでした。当時、罪は償うことによって赦されるのだという「贖宥」というシステムがまかり通っていたのです。これはある意味分かりやすいのです。ある説教者は、「あなたの死んだご家族が煉獄で苦しみながら罪の償いをしているであります。しかし、どうぞ、この献金箱にチャリンとお金を入れるや否や、あなたのご家族の魂は天に挙げられることでしょう」と語り、人気を博していたと言います。

しかし、聖書はそんなことは言っていません。むしろもっと厳しいことを言っています。「義人はいない。一人もない」(ローマ 3:22)。私たちは、ちょっとお金を加算したから神様は赦して下さいなどという取引など、もともと出来ない存在なのです。私たちは、ただ一方的に赦して頂けなければ、神様の前に立つことなど出来ないのです。聖書は語ります。真の意味で神様との取引をして下さったのは誰でしょうか？ 主イエス・キリストだと聖書は証しします。この方がして下さいしたのは、罪の償いではなく、私たち自身の贖(あがな)いです。罪の償いは、何度もしなければいけない事です。けれども、イエス・キリストは、たった一度だけ、私たちのために、その命を献げて下さったのです。それは、自分の力では神様の許に戻れない者を、み許に引き戻すためです。私たちは皆、今それほど神様に愛され、「神のもの」「神の子」とされているのです！「贖い」とは、私自身のこの命も人生も、全部主が責任を取って下さる、ということです。ですから私たちは詩編の言葉にあるように「主の成し遂げられることを仰ぎ見よう」(9 節)、また 11 節の言葉「力を捨てよ。私は神」(口語訳では「静まって、わたしこそ神であることを知れ」、という言葉)、と「アーメン」と受け止めることが出来るのではないのでしょうか。

ルターは 63 才で心臓の疾患で亡くなりました。彼が死の 2 日前に書かれたという手紙の最後にはこう書かれてあったと言います「私たちは(神の)乞食だ。それは本当だ」。

私たちは、本当に、ただ神様から物乞いのように受ければよいのですね。神様が天から降らせて下さる私たちを生かす魂の糧。それは主イエス様ご自身です。そして、主は聖書を通し、聖霊を通し、私たちに親しくお語り下さるというこの恵み。この恵みの中でお互い生かされて行きたいと思います。最後に使徒パウロのローマの信徒への手紙の 14 章の言葉をお読みしてお祈り致します。

「わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。」(14:6~8)